二〇二七年度

吉祥寺湧水高等学校　学力方式サンプル問題　国語

1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校生の時田は、友人の川久保から、同級生である山野舞子への恋心について相談を受けていた。ある日、時田は川久保から「告白する決意を固めたので、放課後についてきてほしい」と頼まれた。ところが、放課後になって川久保は弱気になり、時田に「自分の代わりに、彼女へ自分の好意を伝えてきてほしい」と言い出した。川久保の頼みを断りきれなかった時田は、山野に川久保の想いを伝えたが、山野は「悪いけど、私、川久保くんとはつき合えない」と返答した。以下の場面は、山野が立ち去ろうとした時田を呼び止める場面である。

「待ってよ、時田くん」

ぼくは、目で山野に何か用かと問いかけた。

「私が、どうして、川久保くんとつき合えないのか尋ねないの？」

「いや、別に、ぼくの知ったことじゃないし」

「ひどい」

山野舞子は、睫毛（まつげ）を伏せて唇（くちびる）を噛（か）んだ。ずい分、長い睫毛だなあ、とぼくは、その下に出来た影を見て思った。確かに彼女は美少女だ。それは認める。しかし、その下で噛まれた唇に演技があるとぼくは感じた。白い小さな歯は、計算されたように唇を押している。媚（こ）びているじゃないか、こいつ。ぼく①は途端に不快になった。ぼくは、

a ショウドウが肉体を動かすのと、作為が肉体を使うことの間にある差というものに非常に敏感な自分に、その時、気付いた。

「時田くんて、意地悪だと思う」

何故（なぜ）だ⁉　もしやぼくは、彼女に媚を売られているのではないのか。

山野は、伏せていた睫毛をゆっくりと上げた。それと同時に、足許（あしもと）

にあった彼女の視線が、ぼくの体の上を移動して来た。彼女の瞳が、ぼくのそれをとらえた時、ぼくは驚いて目を見張った。彼女の睫毛は、涙で縁取られていたのだ。

「ど、どうしたんだよ」

「時田くん、冷たいよ」

「ぼくが？　どうして？」

「私の気持に気がつかない」

「なんだ、そりゃ？」

山野は、首を傾けて、ぼくを見上げた。眉が、せつなそうにひそめられていた。完璧だ。ぼくは、そう思った。山野の後ろには、雨上がりの中で揺れる紫陽花が咲き乱れ、彼女の顔を青白く見せていた。そのせいか、瞼の縁の赤みがいっそう引き立ち、彼女は文句なしに可憐だった。

これなら、どんな男も夢中になるだろうと、ぼくは思った。彼女のすべては、無垢な美しさに満ちている。けれど、この世の中に、本当の無垢など存在するだろうか。人々に無垢だと思われているものは、たいてい、無垢であるための加工をほどこされているのだ。白いシャツは、白い色を塗られているから白いのだ。澄んだ水は、消毒されているから飲むことが出来るのだ。純情な少女は、そこに価値があると仕込まれているから純情でいられるのだ。もちろん、目の前の女の子は美しい。そのことに疑いの余地はない。けれど、何かが違うのだ。ぼくの好みではない何かが、彼女の美しさを作っているのだ。

「好き」

「えっ？」

ぼくは、一瞬、山野が何を言ったのか良く解らなかった。怪訝な表情を浮かべるぼくから目をそらさずに、もう一度、彼女は言った。

「私、時田くんが好きなの。だから、川久保くんとはつき合えない」

「嘘だろ⁉」

見る間に、山野の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。ぼくは、すっかり動転していた。いったい、なんだって、こうなるのだ。ぼくは、こ

ういう状況には、まったく慣れていなかった。

「私のこと嫌い?」

「そうじゃないけど」

「じゃ好き?」

「困ったな」

まさか、好きじゃないとも言えないし。山野は、ポケットからハンカチを取り出し、涙を拭った。

「ぼく、好きな人、いるから」

「知ってる。うんと年上の人でしょ。私、割り込めない? 待っててもいい。だって、ずっと、私、時田くんのこと、好きだったんだもん」

待っててもいい。その言いまわしが、ぼくの好みではないのだ。ぼくは、待つ女など嫌いなのだ。もっとも、本当に山野舞子が、ぼくを待つとは思えないが。

―中略―

山野舞子は、傷付いた表情を浮かべながら、ハンカチで口を押さえていた。可愛い花模様のハンカチ。どうして、そんな仕草をするのだろう。そのハンカチをどけて見ろと、ぼくは言いたかった。ハンカチの下の唇が、どのように醜く歪んでいるのか、見せてもらいたいものだ。

「山野さん、自分のこと、可愛いって思ってるでしょ。自分を好きじゃない人なんている訳ないと思ってるでしょう。でも、それを口に出したら格好悪いから黙ってる。本当はきみ、色々なことを知ってる。物知りだよ。人が自分をどう見るかってことに関してね。高校生の男がどういう女を好きかってことについては、きみは、熟知してるよ。完璧に美しく、けれども、完璧が上手く働かないのを知ってるから、いつも、ちょっとした失敗と隣合わせになってることをアピールしてる。確かに、そういうきみに誰もが心をウバわれてるよ。だけど、ぼくは、そうじゃない。きみは、自分を、自然に振る舞うのに何故か、人を引き付けてしまう、そういう位置に置こうとしてるけど、

ぼくは、心ならずも、という難しい演技をしてるふうにしか見えないんだよ」

山野は、無言で立ち尽くしたきりだった。顔は、いっそうあおざめていたが、もう、それは、背後の紫陽花のせいばかりではなかった。

「ぼくは、人に好かれようと姑息に努力する人を見ると困っちゃうたちなんだ。ぼくの好きな人には、そういうとこがない。ぼくは、女の人の付ける香水が好きだ。香水よりも石鹸の香りの好きな男の方が多いから、そういう香りを漂わせようと目論む女より、自分の好みの強い香水を付けてる女の人の方が好きなんだ。これは、たとえ話だけど」

いきなり、ぼくは、頬をぶたれた。山野舞子は、目を輝かせているように見えたが、それは怒りのせいだということが、彼女のフクらんだ小鼻で解った。

「何よ、あんただって、私と一緒じゃない。自然体っていう演技してるわよ。本当は、自分だって、他の人とは違う何か特別なものを持ってるって思ってるくせに。優越感をいっぱい抱えてるくせに、ぼんやりしてる振りをして。あんたの方が、ずっと演技してるわよ。あんたは、すごく自由に見えるわ。そこが、私は好きだったの。他の子たちみたいに、あれこれと枠を作ったりしないから。でもね、自由をよしとしてるのなんて、本当に自由ではないからよ。私も同じ。あんたの言った通りよ。私は、□自分てのが好みなのよ。そういう演技を追求するのが大好きなの。中途半端に自由ぶってんじゃないわよ」

ぼくは、打たれた頬を押さえたまま呆然としていた。山野舞子は、怒りで震える手で、髪の乱れを直した。そして、ぼくを一瞥すると、大きく息を吐き、その場を立ち去ろうとした。

「山野さん」

「何よ‼」

「今の、こたえた」

「ふん。それから、つけ加えておくけど、私が川久保くんとつき合えないのは、彼の背が低いからじゃないからね。私、髪に、ムース付けるような男、大嫌いなの。口開けて、女に見とれてるような男もね」

ぼくは溜息をついて、去って行く山野舞子の後ろ姿を見送った。髪のつやが、離れていても、良く解った。Ⅱやはり、彼女は、美少女だ。ぼくは、そう思いながら、目のはしに映る紫陽花を意識した。

ぼくは、男子便所にこもったきりの川久保に、上手く行かなかった旨を伝えた。情けない相槌が個室から聞こえて来て、ぼくは、彼に同情した。もちろん、山野舞子が、ぼくを好きだと言ったことは告げなかった。それを口に出したら、③ぼくの弱味をもさらけ出すことになる。

他の人とは違う特別なものを持っていると思ってるくせに。彼女のその言葉を、ぼくは、いつまでも反芻していた。もしかしたら、ぼくこそ、自然でいるという演技をしていたのではないか。変形の媚を身にまとっていたのは、まさに、ぼくではなかったか。ぼくは、媚や作為が嫌いだ。そのことは事実だ。しかし、それを遠ざけようとするあまりに、それをおびき寄せていたのではないだろうか。人に対する媚ではなく、自分自身に対する媚を。

（山田詠美　『ぼくは勉強ができない』）

問1　傍線部ａ「ショウドウ」、ｂ「ウバ」、ｃ「フク」のカタカナを漢字に直しなさい。

問2　傍線部Ａ「心ならずも」、Ｂ「枠」の意味として最もふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ａ「心ならずも」

ア　自分の考えを十分に確かめて、行うこと。

イ　思いがけない出来事が、偶然起こること。

ウ　相手に気に入られるように、進んで行うこと。

エ　自分の意思や望みに反して、そうなってしまうこと。

Ｂ「枠」

ア　行動や考え方を一定の範囲にしばる、決まりや価値観。

イ　他人からよく評価されるために守る、礼儀や作法。

ウ　自分らしさを示すために意識して作る、特徴や個性。

エ　人間関係を保つために越えないようにする、境界。

問3　本文中の［　　］にあてはまる語句として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　誰よりも自由な　　イ　人に愛される

ウ　他人を評価する　　エ　自分の好みを貫く

問4　傍線部①「ぼくは途端に不快になった」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　山野の仕草が自分への好意を表すものと感じたが、その好意を言葉で示そうとしない点に反発したから。

イ　山野の動きが計算されたものだと感じ、そのことから自分への好意そのものも偽りだと判断したから。

ウ　山野の仕草に可愛らしさを感じながらも、自然な動きではなく人に魅力的に見せるための工夫だと思ったから。

エ　山野の仕草が人から好かれるためのものだと感じ、自分には同じように振る舞えないことに苛立ったから。

問５　傍線部②では「白いシャツ」「澄んだ水」が例に挙げられています。この二つの例を通して時田が示そうとしている考えと、あとの香水のたとえ話とのつながりの説明として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　清らかさは人の手が加わると失われると捉え、香りの話でも加工の少ない自然な印象を与える人を評価している。

イ　白さや清潔さが加工によって保たれると認め、香りの話でも人に好かれるよう工夫する人の気遣いを評価している。

ウ　人為的な加工で純粋さを演出することに価値を見出し、香りの話でも作為を感じさせずに振る舞う人を評価している。

エ　無垢に見えるものにも人の手が加わっていると捉え、香りの話では周囲の好みでなく自分の好みを優先する人を評価している。

問６　傍線部③「ぼくの弱味」とは何ですか。四十字以内で説明しなさい。

問7　二重傍線部Ⅰ～Ⅲの描写のはたらきについて、本文に即した説明を**二つ**選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅰで涙に縁取られた目もとが描かれるのは、感情を隠せない山野を見て、時田が仕草への疑いを弱めたことを示すためである。

イ　Ⅰの青白さは可憐さを際立たせるものとして描かれるが、Ⅱの青ざめは、時田の批判を受けた山野の感情の動きも示している。

ウ　Ⅱでは批判によって山野の演出が崩れ、Ⅲでは時田が、その飾らなくなった姿を新たに美しいと評価する変化が示されている。

エ　Ⅲでも時田は山野を美少女だと認めており、それまでの彼女への反発が、容姿の美しさを否定することとは別だと確かめられる。

オ　Ⅰと Ⅲで美しさが繰り返されるのは、時田が山野の反論も魅力を示す演技と捉え、その言葉に動かされなかったことを示している。

問８　この文章における「ぼく」の語り方について、本文全体を踏まえた説明として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　山野の仕草は時田の観察と判断を通して描かれているため、彼の解釈をそのまま山野の本心とみなさず、両者を区別して読み取る必要がある。

イ　山野の仕草が時田の好みに沿って変わり、その変化が内面を明らかにするため、時田の批判を手掛かりに山野の本心を読み取る必要がある。

ウ　初めは山野の仕草が時田の判断で描かれ、反論の後は客観的に描かれるため、二人の言葉より後半の行動を山野の本心と結び付ける必要がある。

エ　時田の判断は山野の発言によって否定され、彼女の演技への疑いも解消するため、初めの描写を山野への偏見として読み直す必要がある。

問９　本文の終わりで、時田は「演技」についてあることに気づきかけています。それを説明した上で、あなた自身はそのような「演技」についてどのように考えますか。理由も含めて百字以内で書きなさい。